Demon's heart

柳　リョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｄｅｍｏｎ'ｓ　ｈｅａｒｔ

【Ｎコード】

Ｎ１３９１Ｚ

【作者名】

柳　リョウ

【あらすじ】

デリエスタ王家で王位継承権を得るには、ある一族の人間と契約をしなければならない。……が、第一王女マリアナの契約相手は契約を不服とする自分勝手な騎士。横暴騎士と猫被り姫の、歪んだ主従関係は果たして覆すことが出来るのか！振り回し、振り回されながら、大切なものを見つけていくミステリー風味王宮ファンタジー。

ニコッとタウンのブログにて別タイトルで連載中です。いち早く読みたい方はそちらへどうぞ！といってもそこまで進んではいません

が^^

第一話　横暴騎士

デリエスタ王家の歴史は三百年にも上る。
かつて内乱の絶えなかったデリア地域をまとめ上げた初代国王たるローグは、神より与えられた神力により、数多の小国をまとめ上げ、　現在のデリエスタ王国を作った。
そんなローグは、通称魔王と呼ばれる。
悪魔を従え戦場を駆ける、魔の王と。
本当に悪魔を従えていたのか。その真偽は、確かではない。
けれど、彼の傍に常に血濡れの瞳と濡羽色の髪の鬼神のごとく強い男がいたということ。
そしてその男の子孫が、今もなお、デリエスタ王家に仕えていること。
それだけが、事実。

――――――

デリエスタ王家の王位継承権は、ほかの国よりも少々複雑である。
もともと、デリエスタ王家は王妃は三、四人であるものの、産めよ増やせよ主義であり、王子王女は２０に近い。
彼ら全員に王位継承権を与えるとなると、必然的に壮絶な王位争いが始まる。
そこで定められた掟は、忠臣である悪魔の血を引く、ドレーク一族の人間が主と定めた人間が王位継承権を手にする、というもの。
実際は、二段階の契約によりドレーク一族の人間を自分の配下として縛り付けられた人間が王となる資格を与えられるというわけだ。
一つ目は、血による契約。二つ目は、名による誓約。

この場合、ドレーク一族の意思にかかわらず、強引に契約だけは結んでしまうことができる。するとドレーク一族の意思は無視され、忠誠を誓ったことにはならない。

……で、忠誠を誓っていない配下と契約を結ぶとどうなるかというと、今現在の私と同じ状態になる。

「おい女、酒をもってこい」

「……女ではありません、デリエスタ第一王女マリアナ・ウィル・デリエスタです！！」

「なんだ、女じゃないということはお前は雄だったのか？それは恐れ入った。その胸にある二つの肉塊はどこで手に入れたんだ？」

「口を慎みなさいっ！！私はあなたの主で」

「あぁもういい。おいそっちの侍女、酒を持って来てくれ酒を」

まったく話を聞いていない。

ぎりりとにらみつければ、さらに眼力を持つ赤の瞳と目が気だるげにこちらに向けられる。あくまでも気だるげに、だがしかしその眼力は強い。

悪魔の血を引くという、ドレーク一族。彼らの特徴は黒髪と、血染めの紅い瞳だ。その瞳は、見るだけで全身を身震いさせるほどの恐怖を覚える。

ふと視線を廊下に走らせると、身を小さくしているメイドがいた。手には酒瓶、さっき酒を取りに行った者だろう。

完全に怯えきっている彼女に苦笑をこぼしながら、私は彼女に近寄る。

「ひ、姫様、あの、その……っ」

「いいわ、私が渡しておきます。あなたはもう下がりなさい」

「は、はい！ありがとうございます！」

一瞬にして表情が輝き、脱兎のごとく立ち去りかけたメイドは途中で思い出したように立ち止まり、恐る恐る戻ってくる。

「それと、もうしばらくしてからファディ殿下がこちらにいらっしゃるそうです」

「あらそうなの？わざわざありがとう」
全力の笑みで労えば、今度こそメイドは逃げていった。
「メイドがアレではお前も大変だな。処分してやろうか？」
「メイドよりむしろあなたのほうが大変です。まったくもう……」
この男が怯えられているのにはその容姿とはほかに、もう一つ理由がある。
この屋敷にやってきた当日に、メイド三名兵士五名を切り殺すという大惨事を引き起こしたのだ。
それ以来、この男に近づきたがるものがほとんどおらず、傍にいているこちらも被害を被っている。
「それよりも、今日は来客があります。身内の非公式な訪問ですが、くれぐれも身勝手なことはしないように！」
「うん？これはなかなかの美酒じゃないか。産地はどこだ？」
「聞いているのですかあなたは！！」
「聞く気がない」
いっそ潔いほど忠誠心というものを持ち合わせていない男。彼が私の配下である。
名前はまだ知らない。教えてもらえていない。
第二の誓約は、いまだ結ばれていなかった。

第二話　嵐の如く

「や、姉さん元気？」

それから約一時間後。相変わらずの飄々とした笑みを浮かべて、異母弟であるファディ・ルーリア・デリエスタがやってきた。傍には、彼の配下であるドレーク家の男性。

「ファディは相変わらず元気そうね」

「うんまぁね。優秀な補佐もいるし。で、姉さんのほうは少し疲れてる？」

「けっこう」

ファディは苦笑いを浮かべ、傍に付き添っていた黒髪の男性を振り仰いだ。

「カル、ちょっと席はずしてて。ついでにお兄さんの様子でも見てきて」

「はい、了解しました」

カル、と呼ばれた男性は柔和な笑みを浮かべて一礼し、その場を立ち去る。実に優雅で気品があり、アレの弟とは思えない。

「長男と次男でこれだけ性格に差があるってどうかと思うわ……」

「カルも最初はそれなりに荒れてたけどね。躾けた」

「……今その爽やかな笑顔とつりあわない単語が出た気がするわ。ちょっと疲れてるのかしら」

引きつった笑みを浮かべて、それからため息をつく。

「それにしても、姉さんさすがに軽視されすぎじゃない？どういう教育しているのかな」

「教育って、子供じゃあるまいし……、……」

苦笑がゆっくりと消えていく。

「私は、きっと彼の主にはなれないわ」

激しい崩壊音が、会話に割り込んだ。

「な、ななっ！？」

「何？何が起きた！？」

とっさに腰を浮かせ音が聞こえた方角に身構える。

「あの方向……訓練場？」

確か兵達の希望によって作られた小さな訓練場があそこにはあった筈だ。

「……いやぁ、なんか嫌な予感がするなぁ」

「同感」

軽く顔を見合わせて、そして駆け出す。

そう長く走らないうちに、こちらに向かって使用人が駆けて来た。

「なにがあったの！？」

「そ、それがっ！カル殿に訓練場をお貸ししたところ、崩壊いたしまして……」

ファディがつんのめった。

「カルが！？何箍外してるんだアイツ……」

「とにかく行けば分かるわ」

再び長い廊下を駆け出す。目的地に近づくほどに喧騒は大きくなる。訓練場の前は人垣が出来ていた。

「静まりなさいっ！」

声を張り上げると、はっとしたように使用人たちが振り返る。自然と開いた道を割り込むように私はそこに足を踏み込……んだ瞬間、銀色の閃光が目の前を駆け抜けた。

「っ……！？」

「……、なんだ、お前か」

一瞬驚いたように見開かれた紅の瞳。

……明らかに私は視界に入っていなかった。
「邪魔だ、退いてろ」
「それよりも前に、この状況を説明して頂戴」
えぐれた地面。
なぎ倒されている木。
吹き飛ばされた訓練道具。
原形をとどめていない柵。
説明を求めた相手は、こちらをアウトオブ眼中。対戦相手、カルにのみ意識が注がれている。
ぴりぴりとした緊張感。ため息をつくと、私は彼らの間に立ちふさがった。
「……邪魔だ、斬るぞ」
「契約を忘れました？ローグの名において、あなたは私を傷つけることは出来ません」
苛立たしげに眉を顰める。
「カル！遊びは終わりだよ。来い」
ファディのいつもよりやや低めな声が響く。それと同時に背中に感じていた殺気が掻き消えた。
けれど、前の殺気は消えない。
「剣を収めなさい」
「お前の命令を聞く気はない」
睨み合う。先に折れたのは、目の前の男のほうだった。
静かに剣をしまうと、そのまま歩き出す。すれ違いざま、低い声で囁いた。
「俺はお前の命は守るが、命令を聞く気はない。それでいいといったのはお前だったな？」
きつく拳を握り締める。足音が喧騒にまぎれ聞こえなくなるまで。
「そうよ。それでいいと最初に言ったのは、私」

第二話　嵐の如く（後書き）

感想、アドバイスなど、もしよろしければ下さい。
ほんの一言でも力になります。よろしくお願いします。

第三話　出会い

片手で数えられるほど、ほんの数日前。空を雲が覆い、少々暗い日だった。

午前中は晴れていた。大きな木の下で本を広げていた私は、その天気に眉をしかめた。

（残念ね、いいシーンだったのにいったんお預けかしら）

屋敷に戻れば一人で読書をするような時間はなかなか取れない。なんせ私は１６と年頃の王族の娘、やれ公爵子息だことの隣国の王子だことの縁談が山ほど降って来る。この時はまだ、私は王位継承権を持たなかったし、持てるとも思われていなかった。

けれどそれでも、縁談は嫌なのだ。何が悲しくて初対面の男と結婚して屋敷に押し込められて一生を過ごさなければいけないのだ。

軽く体を伸ばし立ち上がろうとしたとき、何処かで物音がした。

（何……？）

かすかに漂う、金臭い臭い。

全身が凍ったように固まった。

素早く木の陰に隠れ、耳を澄ます。何の物音もしない。

しばらく経って、どさり、と何かが地面に落ちる音がした。

ゆっくりと視界をめぐらせると、黒いずた袋のようなものが少し離れた草むらの影に転がっている。

それが人間だと気付いたのは、それから赤い血が流れているのが目視できた時。

私は周りを伺いながら、ゆっくりとその人間に近づいた。

その人間は、男性だった。年は２０代前半から半ばほど。全身大小の傷だらけだ。

傷だらけ、だけれど。

「……何、これ」
ゆっくりと傷口が塞がっていく。赤く染まっていたむき出しの腕もだんだん血が止まっていく。数分あればすべての傷が塞がってしまうだろう。治療も手助けも必要がない。
まじまじと、男の顔を見た。
「ドレーク一族……」
ドレーク一族の人間は、さまざまな能力を持っていると聞く。運動能力も然り、回復能力も然り。
別の感情が、私の中を駆け抜けた。
ドレーク一族を無理やり契約させるのはとても難しい。意に沿わないものであれば撥(は)ね退けるだけの力を彼らは持っている。例えそれが王族相手でも。
けれど、衰弱している今ならば。
意識のない今のこの男ならば、無理やり契約させることが出来るのではないか。
どくり、と心臓が跳ねる。
多くは望まないから。私は王族として認められたいだけで、あなたに無理強いはしないから。
胸元のブローチを外すと、金具を使って手のひらに一筋の傷をつけた。じわりと血がにじむ。
深呼吸を行ってから、塞がりかけている男の傷口に触れる。血が交わるように。
「魔導王ローグの名において、我を守り、我に従え」
その瞬間、男の深紅の瞳がかっと見開かれた。
驚いたように眼前に放り出してある自分の腕を見、そして私の手のひら、腕、顔へとゆっくりと視線が移動する。
瞳があった瞬間、後悔が込み上げた。
「お前、契約を……！？」
一瞬見開かれた瞳は、ぎらぎらと燃え滾るように危険な光を湛える。

「っ……勝手でごめんなさい、でも、その……」
「……」
切り捨てられるのでは、と思うほどの激しい殺気は、気付いたように急速に失望に変わった。
「……契約がなければ、今頃お前の胴と頭は付いていなかっただろうな」
「ごめんなさい。勝手なことをしてしまって。でもあなたの力を借りたいの」
「強引に押し切られた跡に事後承諾か？」
冷ややかな声だ。引きつった喉を無理やり動かして声を吐き出す。
「あなたの意に沿わないことは出来るだけ命令しないわ。あなたが嫌にならないようにこちらも出来る限りのことをする。傍にいてくれるだけでいい、それだけで十分よ」
それが愛情などという甘ったるいものを指しているのだと勘違いするほど鈍い男ではないようだった。男は薄く笑う。
「なるほど？お前にとって俺はモノか」
「……え？」
「王位継承権を持つ者である、と示すためのお飾りになれとでもいうんだろう。……吐き気がする」
最後の言葉にびくりと身をすくめる。
低く低く、氷のように冷たい。
「べ、別に私はモノだなんて……」
「いいさ、痛い目にあった後だから今の俺は素直だ。お前が手放したくなるまで滑稽なお飾りになってやろうじゃないか」
男は軽く顔をぬぐう。全身の出血はほとんど止まっているようだった。
「……この服ももう駄目だな。服を用意しろ、女」
「……分かったわ」
罪悪感。それだけが私の胸の中を占めていた。
このとき訂正しなかった男の偉そうな態度は、私の罪悪感が薄れ

た今になってもそのままである。

第三話　出会い（後書き）

初期の部分の展開の速さに我ながら驚くw

感想、アドバイスなどよろしくお願いします！

第四話　忍び足

（よく考えれば、私もなかなか馬鹿なことをしたわね……）
無理やり結んだ契約は、いまだ自分を振り回している。私が彼を手放すまできっとこの関係は変わらない。
このゆがみは果たして、元に戻るのか、それとも弾けて我が身を傷つけるのか。
ベッドに倒れこむと、廊下の喧騒が耳についた。使用人たちはいまだ後片付けに追われているらしい。
「……よく考えれば、好機ね」
思い立って、クローゼットを開く。ゆっくりとドレスを掻き分けて奥を覗き込めば、そこにはメイドにもばれないように丁寧に隠した包みが置いてある。
包みの中身は、使用人や町娘達が一般的に着るシンプルな麻のワンピースとズボンだ。ドレスを手早く脱ぎ、ワンピースに着替える。装飾性よりも機動性を重視した服は、私のお気に入り。
髪留めは絹のリボンから革紐へ、黄金のブローチは合金のネックレスへ。ハイヒールを革靴に替えれば、準備は万端だ。
金貨ではなく銅貨をつめた皮袋を懐に入れ、護身用の短剣を一応腰に挿す。
そして最後にもう一度誰もいないことを確認してから部屋の扉に鍵をかけ、窓枠に足を掛ける。
「とうっ！」
金の髪をはためかせ、私は跳んだ。

私の母親は、国王の妾妃だった。
庶民の生まれであった彼女が私達に言ったことがある。
「人を統べるならばまず、人を知りなさい。人を知るためなら王族

のプライドなんて捨てなさい。王族の血なんてしょせん一銭にもならないんだから雑草以下よ。食べられて薬にもなる野草のほうがよっぽどご立派よ」

国の頂点の、尊き神の血を引く一族とも言われる王族の血を雑草以下と言い切った彼女は、私達にさまざまなことを教えてくれた。

町での生活、買い物の仕方、服装、商品の良し悪しの見分け方、値切り方しゃべり方遊び方……

一見何も役に立たないような当たり前のこと、けれど王族に生まれた私達は知ることが出来なかったはずの庶民の当たり前を、母は教えてくれた。

人を知るために。王族という偏った視点だけで政治を行わないように。そんな母は型破りだったけれど、とても素晴らしい教育をしていたといえる。

実際城にいるのと町にいるのとでは情報量も何もかもが比べ物にならない。

だからお忍びは、我が兄弟達の中では結構当たり前のことになっていた。

……久しぶりのお忍びに、少々浮かれすぎていたらしい。

いつもより勢いをつけて跳んだ私は、着地の際に軽くバランスを崩してしまった。左足に鈍い痛み。

「っ……」

一瞬よろめきかけた体勢を立て直し、改めて足首を軽く動かす。軽い捻挫をしているのか、少々違和感がまとわりついた。

「……まぁ、そこまでひどくないから大丈夫よね」

数歩歩いて状態を確かめてから、私は草陰に走りこんだ。あたりに人がいないことを確かめてから、裏庭を目指して半腰で駆ける。

裏庭の枯れた古井戸は仮の姿、その正体は町外れまで続く王族の秘密通路だ。

開けた裏庭に出る前に一度草むらに身を隠し、再度ゆっくりと辺りを見回す。
……。
ばっちりと目が合った。
「やぁやぁ、こんなところで会うとは奇遇だな深窓の姫君？怪我人がどこに行くつもりだ？」
「……あなたこそ、ずいぶんと暇そうですね。あいにく我が家では庭師は充実してますからわざわざ庭木を伐採しに来なくてもよろしいんですよ？」
皮肉に皮肉を返せば、気だるげな瞳がこちらを見る。相変わらず真意の分からない男だ。というか、何故怪我をしていることがばれたのか。
けれど少なくともまともな騎士道は持たない男だ、止められはしないだろうと高をくくり、脇をすり抜ける。
けれど急に左手が動かなくなり、思わずつんのめった。
視界をそこに移動させれば、腕をしっかりとつかんだ手。見上げれば、珍しく皮肉げな笑みを浮かべていない男の顔。
「なんのつもりです？」
「俺は質問したはずだぞ。どこへ行くつもりだ？」
「それがあなたに何の関係が？」
突き放すためではなく、心から不思議でそう聞いた。自分本位のこの男が何故それを聞こうと思ったのかが謎だ。
「当たり前だ。お前が危険な目に遭われると困る」
「……」
どうも、幻聴が聞こえる。

第四話　忍び足（後書き）

マリアナの皮肉が分かりにくかったらすみません。
訓練場を破壊した際に木をへし折ったので、それをかけた皮肉です。
たぶん空振りしてます。
分かりにくい文章で本当にすみませんでした。

第五話　危機

「今、なんて言いました？」
つい聞き直せば、彼は不思議そうのこちらを見た。
「なんだ、耳が遠くなったのか？」
「皮肉は結構です。今、なんて言いました？危険な目に遭うと困るって言いました？困るって！？」
「何を驚いているんだ。契約だろう。……」
契約、という言葉を口に出してから数秒、不思議そうだった彼は目を見開く。
「もしやお前、契約について理解してないのか？」
「はい？理解も何も、あなたは私を傷つけられず、守らなければいけない、そういうものでしょう？」
もう何がなんだか分からない。私の返した言葉に、男は天を仰いだ。
「……無知」
「失礼ですね。契約がどうしたっていうんですか」
聞き返すと、彼は黙って私の右手をとった。
そして、一閃。
「……っ！？」
手を引き抜く暇もなかった。
鋭い痛みと共に、手の甲に赤い筋が走る。
たいした傷ではない。けれど恐怖を与えられるには十分だった。
「な、んで……」
「何故傷つけられるか？ははっ、笑えるな。本当に契約内容を知らないわけだ」
ぴたり、抜き放たれた剥き身の剣が喉元に突きつけられる。
「隙を見せたあんたは馬鹿だ。さぁ、俺を解放してもらおうか」
冷たい汗が、背筋を伝った。傷ついた右手をかばうように左手で

覆う。わずかににじんだ血は押さえた袖の布にしみを作った。
契約。本当の契約内容はなんだった？鋭い殺気が思考を凍りつかせる。
怖い。怖い怖い怖い怖い。
ぽたり、と。静寂の中、血の滴る音だけが響いた。

（……血？）
視線は動かさないまま、左手で傷をなぞる。いまだ血は止まらないが、ほとんどは布に吸い取られている。それでもなお滴るほどの出血
ではない。
思考が冴え渡る。冴えさせる。怯えたら負けだ、落ち着け私。
（……一か八か）
ゆっくりと一回深呼吸をする。そして。
「とうっ！！」
「なっ！？」
剣に向かって飛び込んだ。
言っておくが、本当に自殺行為を行ったわけではない。ちゃんと相手が剣を引けるようなスピードで、万一当たっても死にはしない肩を
ぶつけるような形で飛び込んだのだ。危険なことにかわりはないが。
彼はあわてて剣を引いた。一瞬遅かったのか、軌道がぶれ頬に傷が走る。
私にも、彼にも。
「見抜いたわよ！大怪我負いたくなかったら諦めなさい！全力で斬られにいってやるわ！」
「勘のいい女だな、ったく」
苦虫を噛み潰したような顔で、彼はこちらをにらむ。

彼が私を傷つけ、逃げ出さなかった理由。

私が傷つけば、彼もまた傷が移るから。これが、本当の契約の正体だ。

第五話　危機（後書き）

そろそろサブタイトルに疲れてきた作者。
やはりサブタイトルなんてつけなきゃ良かったなぁ……
浮かばなくなったら全部サブタイトル消します。

第六話　前・契約者

彼は舌打ちをすると剣を収めた。同時に、殺気もなりを潜める。
相手の様子を見ながらも、私はふっと体の力を抜いた。
「まったく油断も隙もないわねあなた！いいかげんにしなさいよ！？そーろそろ堪忍袋の緒も切れるわ！ケッ！」
「……、……お前、それ地か。猫被ってたのか」
「ええそうよ。悪い！？」
私はギロリと相手をにらみつけた。
「というか！猫被りじゃなくたっていい加減素で切れるわよあんた！！そりゃ私だって最初結構ひどいことしたけれども、これはないわよこれは！！」
「お前が手放せば全て解決するぞ」
「ええ手放してやるわ。手放してやりますとも！」
私の言葉にきらりと目を輝かせたこのバカ正直な男に、びしりと指を突きつける。
「一ヶ月。一ヶ月で私は名を売るわ、そしたらお役御免よ」
「何？王になりたいんじゃないのか？」
「なるわけないじゃない。私よりも有能な候補はすでにいるのよ。私はただ、彼らを支えて、共にこの国を守りたいだけ。だけどこのご時世、王の子の一人というだけの私に誰が政治に首を突っ込むことを許してくれる？しかも女。きっかけを作らなきゃ、私の願いはただの夢物語で終わっちゃうの。そう……そうよ。だからあなたを利用した」
男は静かに、こちらを見ていた。
「約束するわ。一ヶ月で私は必ずあなたを解放する。だからその間だけでもおとなしくしていて頂戴」
「……いいだろう。これ以上隙を探すために尽力するよりは、そちらのほうが楽そうだ」

彼はぐるりと辺りを見回すと、井戸を視線で示した。
「そろそろ兵が来るぞ。戻るか行くか、決めたらどうだ？」
「行くわよ。ちゃんとついてきて頂戴」
井戸の縁をつかみ、足場を使って湿った空気が充満する井戸へと降りる。底の横穴に入るのとほぼ同時に彼が降ってきた。
「ここから狭いから頭をぶつけないように」
「お前こそ転ぶなよ。迷惑だからな」
「一言多い」
狭い通路に松明は持ち込めない。その代わり壁にはめ込まれた白光水晶が柔らかな光を放っている。
「ねぇ、質問してもいい？この契約の正体、ドレーク家にはちゃんと伝わっていたの？」
王家には、少なくとも私には伝わっていなかった。
背後から、少し困ったように低い声が響く。
「いや、伝わってはいなかったな。今考えればそれを暗示するような名称は伝わっているが」
「名称？」
かつかつと足音だけが響くこの通路は少々不気味だ。会話を続けようと聞き返す。
「王家の者は俺達を配下と呼ぶが、俺達はお前達を心臓と呼ぶ。後に分かったことだが、契約によって移された傷にドレーク家の再生能力は通用しない。だから、心臓は俺達の唯一の弱点だ」
「後に分かったってことは、どこかに資料か何か残ってたの？」
「いや、前の主人を斬った時に知った」
ぴたり、と足が止まる。
「……前の主人？」
契約者がいたのか、彼は。
「契約は上書き制だからな。お前と会った時はちょうどそこから逃げて来た時だった」
「……ちなみに、前の主人って言うのは、私の兄弟の誰かかしら」

ほかに誰がいる、と彼は笑う。
「前の主人は第二王子、ラトム・ルーリア・デリエスタだった。やけに俺を屈服させようとしてきたから斬って逃げようとしたんだが、逆にその負傷が足手まといになった」
斬りつけたのは、ちょうど利き腕である右手であったらしい。相手の動きを封じるための攻撃だったが、逆に自分の動きを封じてしまい、ほかの彼の部下に苦戦することになった。
そしてぼろぼろになった彼の男は、そこにやってきた。
「まぁ、良かったじゃないのラトム異母兄さんから逃げられて。彼は私なんかより数倍性質が悪いわよ」
「だろうな。お前は馬鹿だから」
間髪おかずぱっこーん、と小気味の良い音が響く。
「……っ、痛い」
「相変わらずあなた一言多いのよ。これからあなたのことは「口減らず」って呼んでやるわ」
「はぁ？」
予想通り、嫌そうに彼は顔をしかめる。
「嫌なら、名前を教えてね」
そのままくるりと向きを変え、ずかずかと直進する。
町までは、あと少し。
「……ヴェル」
「へ？」
しばらく経ち、突然ぼそりとつぶやかれた言葉に、私はすっとんきょうな声を出した。
「ヴェル、愛称だ。それで満足か？」
フルネームでなければ、第二の契約とはならないけれど。
きっとこれは歩み寄り。
「満足。よろしくね、ヴェル」

第七話　城下町

王都は、いつ来ても賑やかだ。
王宮は整然としていて、どこか余所余所しさを放つ。けれど王都は雑然としていていつでも賑やかで、光と闇、両方を抱え持つ。
だからこそ、王都には王宮では学べないものがある。
「さぁ！どこから見て回ろうかしら」
目を輝かせながら、私は近くの露天を覗いた。
「こんにちは！甘いお菓子って売ってないかしら」
露天のおばさんは快活に笑った。
「あぁあるよ！クリームたっぷりのパイにクレープ、揚げ菓子にさっぱりレモン風味の焼き菓子。さぁどうだい？」
商品の値札にざっと目を通す。
「あら、今年はイチゴのパイやクレープが安いわね。産地が違うのかしら？」
「そんなわけないさ。ここらのイチゴはみんなフェイル領産だよ。なんでも今年は豊作だそうでね、お陰で菓子屋としては嬉しいばかりさ」
デリエスタの菓子で欠かせないのはイチゴだ。おもな産地はフェイル領。
（けれど変ね……今年豊作という報告は来てなかったわ。あとで確認させましょう）
生産量によって、収めるべき税は変わる。ごまかされているのであればすぐに追求しなければ。
そう考えながら、私はイチゴのクレープを二つ買った。
大通りの人ごみから外れるようにして壁際にたたずんでいたヴェルに、買ってきたクレープの一つを渡す。
「はい」
「……なんだこれは」

不思議そうにそれを見ているだけで受け取らない彼に無理やりクレープを押し付ける。軽く匂いをかいだ彼は、ぼそりとつぶやいた。
「甘い、匂いがする」
「そりゃクレープだからね。ほら、食べて食べて」
そういいながら自分が先にかぶりつけば、もっちりとした生地に挟まれた柔らかいクリームと甘酸っぱいイチゴの味が広がった。
王宮で出される気取ったデザートも嫌いではないが、やはりこの甘いクリームには勝てない。口内で踊る赤い妖精。もっちりと弾力のある生地は、やはり焼きたてでなくては。
興味深そうにこちらを見ていたヴェルも、おそるおそる、といった様子でクレープにかじりついた。
「……甘い」
「ん？あ、もしかして甘いの嫌いだった？」
あまりにも無表情でそうつぶやくので思わず問い返したが、ヴェルは黙って首を振った。
「うまい、な。初めて食べた」
「え、そうなの？ファディみたいに生粋の王宮育ちってわけでもあるまいし、食べる機会とかなかったの？」
……といいつつ、よく考えれば上流貴族の人間ならこんな露天のクレープなど食べないか、とも考える。
返答を待っていたのだが、まったくない。
「ちょっと、……って、あれ？」
いつの間にか姿がない。あわてて探せば、彼はさっきの露天の前に居た。
手には、大量の焼き菓子揚げ菓子。
「おい、金を払ってくれ」
「持ってないんかいっ！！」
当の本人は菓子を持ってさっさと行ってしまおうとするので、怪訝そうな顔をしているおばさんにあわてて代金を渡した。
「……嬢ちゃん、苦労してるねぇ。あんまり横暴な男と付き合

っちゃいけないよ。人生を捨てるようなものだからね」
「……忠告ありがとうございます」
もはや苦笑することしか出来なかった。

第七話　城下町（後書き）

ブログのほうでもいくつか改善点のコメ来てるんですが、後回しにしているというw
いつか時間が出来たら全体的に手直しをしたいですね。

第八話　不穏者

人の波を掻きわけ後頭部をぶん殴ることによって彼を引きとめた私は、無理やり城の方向へと引きずって歩く。
さすがに菓子を抱えて町を見回るのは大変だ。顔なじみの衛兵に大量の菓子を任せ、再び町に繰り出した。
「良い！？これだけは覚えておきなさい！お土産ってのは最後の最後に買うもんなのよ！最初に買ったらあとが大変でしょ！？」
「店を見失ったらどうするんだ」
「焼き菓子なんて何もあそこじゃなくてもどこだって売ってるわよ！！予約必須の人気店でもあるまいし」
私の左手はヴェルがどこかに行かないようしっかりと腕をつかんでいる。数度文句は飛んで来たが黙殺した。
「で、あとはどこに行くんだ？」
「別に目的地があるわけじゃないけれど……そうね、ちょっと遠いけれど一つだけ行きたい所があるわ。まだ時間はあるかしら」
懐中時計を取り出そうとした手を、突然がしりとつかまれた。
「ちょっと、何？」
顔をしかめて睨みあげれば、細められた紅眼と重なる。
少しかがみ、耳元で囁かれた声にびくりと震えた。
「自然にあの菓子屋のところまで歩くぞ。そこで合図をしたら隣の路地に駆け込め。右に曲がって、そこで停止だ」
「な……？」
聞き返す暇もなく、強引に腕を引かれる。その目はしっかりと露天に注がれていて、一瞬冗談かと思った。
「ちょっと、勝手な行動はしないでって言ってるでしょ！」
自然に、私は言えていただろうか。引きずられるようにして私は歩く。
ちょうど店の前に来たところで、彼の体はくっきり九十度回転して

路地に向かって駆け出した。
「走れ！」
「っ……ちょっと！！走り出してから言うのはやめて頂戴！心臓に、悪いっ」
ヴェルは恐ろしく速かった。下手すれば手だけが持っていかれそうだ。まとわりつく裾に苦戦しながら、私は人生で一番速く、駆ける。
角を曲がった――――――瞬間急ブレーキをかけられ、そのまま抱き止められ……もとい正面衝突する。
あわてて身をはがそうとする努力はむなしく、ヴェルに体勢を戻された私が一人で立つ頃にはもう目の前の姿はない。
後ろで、激しく金属のぶつかり合う音がした。
振り返れば、黒い影が二つ、激しくぶつかり合っている。
びりびりとした殺気に、思わず身がすくんだ。
相手の影が、一瞬体勢を崩した。その隙を逃さず、振り上げられる剣。
「ヴェル！殺さないで！」
私の叫びに、ヴェルは一瞬だけ動きを止めた。
その瞬間、跳ね上がる影。一歩引いたヴェルに蹴りを放ち、両手を交差させて防いだ反動を使ってそのまま跳びずさる。
一秒後には、その姿はなかった。
「……何故止めた」
ヴェルの声は、低い。
「相手に殺気はなかったわ。無理に命を奪う必要はないわよ」
「……そうか」
ゆっくりと剣を収め、いつの間にか地面に落ちていた紙を拾う。表情の抜け落ちた顔でそれを私に渡しながら、彼は言った。
「あの刺客の主人、癖からして、第一王子の者だろう。実の兄の所業に対する感想は？」
紙を持つ手が震える。違う、こんなの望んでなかった。
「もう、分からないわ。……悲しいのか、苦しいのか」

――――――『警告だ　身を引け』

支えるために支えたかった人に悪意を向けられるなんて。これこそ本末転倒だ。

第九話　強がり

深く、深く、息を吐いて、吸う。
強張る体をゆっくりとほぐしながら、私はいつものように、背筋を正した。
「ヴェル、行きましょう」
ヴェルは、とても苦々しい顔をしていた。
それを無視してさっさと歩き出すと、後ろからため息がついてくる。
「おい、一旦止まれ」
「何？」
躊躇しながらも振り返ると、がしっと腰をつかまれ、一瞬にして視界が反転する。
「わひゃっ！！」
「色気のない悲鳴だな、おい」
勢いのまま顔が布地に叩きつけられた。黒のマント。
私は担がれたのだ。
「ちょ、放せ！！放しなさいっ！！」
「お前足をさらに悪化させただろう。しばらくこのままで居ろ。目的地はどのあたりだ？」
「東の郊外だけど……とりあえず歩けるからおろして頂戴」
「それよりもまず顔をどうにかしろ」
蝋人形のような顔をしている、と言われて思わず押し黙る。
「……あなたって、本当につかめない人」
「俺自身つかめていないんだ。お前につかめるわけがない」
右手で顔を覆う。いまだ残る血の金臭さに、さっきまではあんなに敵意がむき出しだったのに、と思う。
多分、とても純粋の人なのだ、彼は。敵は敵、味方は味方、敵には厳しく、味方には優しい。そう言う人なのだろう。

零れ落ちた涙は、静かに大地に吸い込まれた。

重圧から逃げたくて、けれど泣くことさえも出来ないとき。
支えてくれた温もりは、いつもすぐ傍にあった。
ファディはいつも優しい気配りで喜ばせ、和ませてくれた。双子のサリアスはいつも傍で愚痴を聞いてくれた。妹のアリアの無垢な瞳は私の癒しだった。グレイ兄さんは、不器用な気配りで私の気をほかの所に持っていこうとして、結果として私を泣かせファディに怒られていた。
いつからだろう。その温もりが遠く離れていってしまったのは。
共に居たいと願うほどに、大切だと理解するほどに、彼らとの距離は開いていく。
支えたい。それは共に居たいからだった。
孤独が怖くて、私は懸命に背伸びをしていた。
結局、私はヴェルに迷惑をかけ、兄に恨まれ、何も出来ないまま今日を生きてる。
間違いに気付くのは、遅すぎたのかもしれない。

幸せな日々は、もはや夢の名残に過ぎない。

第十話　秘めたるは

変な奴だ、と思った。
肩に乗った華奢な体はいまだ小刻みに震えていて、必死に嗚咽を隠そうとしている。
女を肩に抱えた男と言うのははたから見てとても不自然な図なため、周りの視線が痛い。が、横抱きにして運ぶのはどうも俺には似合わない気がした。
それにしても変な奴だ。再び、俺は思う。
最初は、とてもおとなしい奴だと思った。よく怒りはするが、それもまだ『貴族のお嬢さん』の範囲内のレベルだろう。何しろ俺に対して罪悪感が勝っていた。問い詰められるのがいやだと言うような怯えた目をしていた最初の数日は、まぁかなり呆れたものだ。
だが、今日はとても活発な奴だ。大口を開けて笑い、全力で怒りに来る。くるくると表情を変えるこいつは、まるで別人のようだ。
どちらが本当のこいつなのか、などと聞く必要もない。仮面をはずせば、こいつはとても明るい人間なのだろう。
そしてこいつは、とても器用だ。
人に心配をかけることを嫌う、と言うより弱みを見せたくないとでも言うべきか。表情豊かなくせに、けして涙を見せようとはしなかった。
人形のような顔、と俺が形容したのは、何も無表情だったからではない。
笑っていたのだ。彼女は、何事もなかったかのような笑みを浮かべた。それは、壊れてもなお人形師につけられた笑みを浮かべ続ける人形のような、とても不自然で、不気味な笑顔。
気付いていない。笑ってごまかすのにもほどがある。
器用で、それゆえとても不器用。
ふと、自分の右手に目をやる。さっきつけた傷は、すでに血が止ま

っていた。
自分の手に傷があっても別段気にしない。だが、もう一つの手の傷はとても気にかかる。
（……やりすぎたな、俺も）
生まれて初めての自由を手に入れようと、俺は躍起になりすぎていたらしい。
『約束するわ。一ヶ月で私は必ずあなたを解放する。だからその間だけでもおとなしくしていて頂戴』
ふっと、まっすぐにこちらを見つめる青の瞳が脳裏をちらつく。
（約束を、守るとは限らないさ）
もともと強引に結んできたような人間だ。信頼するに値しない。けれど、心のどこかで彼女なら守るであろう、と思っている自分もいた。
不思議だ。何故自分は彼女を信じようとしているのだろうか。
口先だけではないと、心の底からの言葉だと、そう思う理由は。
やっと浮上してきたのか、肩の上であいつがごそごそと動き始める。
「そろそろ下ろして。もう歩けるわ」
拗ねたようなぶすくれたような声に、俺は言われるままそいつを下ろした。
覗き込んだその顔に、もう仮面はない。
「ここからは案内してくれ」
「分かってる」
そっけない返事と共に歩き出す。凛とした後姿は周りを拒絶しているようで、相変わらず可愛げがなかった。

入り組んだ裏路地を歩く。しばしば立ち寄る目的地は、地図なしでも歩ける程度に頭に入っている。
少々不安はあるものの、けして立ち止まって道を確認するような真似はしない。

目元にはわずかだが腫れぼったい感覚があり、たぶん真っ赤に腫れていることだろう。それを見られるのは癪だった。
その建物は、一見すると廃屋のように見える。
私はその扉の前に立つと、勝手に扉が開く。
「おや、久しぶりの来客だね」
扉の中から現れた姿に、私はいまだぶすくれた顔で挨拶を返した。
「いきなりでごめんなさい。中に入れてくれる？本屋」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1391z/

Demon's heart

2011年12月27日00時45分発行